



プロジェクト名称 【参加人数: 名】

## 避難者の“これまで”と“いま”と“これから”をつなぐプロジェクト

活動概要・目的 【活動期間: 2012年6月1日～2013年月日】

2011年3月11日に起きた東日本大震災。地震に伴う大津波によって、東北地方と関東地方の太平洋沿岸部では壊滅的な被害が生じました。震災から1年が経ち、求められる支援も変化してきました。私たちだからできる継続的な復興支援をしていきます。

### 年間活動実績

日程	活動概要	活動場所	活動内容
4～8月	東雲住宅でのヒアリング	東雲住宅	具体的に必要な支援の聞き出し、イベントの計画を練るなど
8月	ログハウスづくり体験教室	芝浦工業大学豊洲校舎	子供たちや親子と芝浦の学生との交流など
9月	佐々木さんの講演会用のパワーポイントづくり	芝浦工業大学豊洲校舎	資料となるパワーポイント、台本の作成
10月	佐々木さんを学食に招待	芝浦工業大学豊洲校舎	福島県に引っ越される佐々木さんの送別会
10月	ふるさと祭りへの参加	福島県会津若松市	田植踊りの撮影
12月	田植踊りのPRページの企画検討		インターネットを利用して田植踊りの情報発信やボランティア募集窓口となりえるかななどの検討案



## プロジェクトの成果・結果・達成度・関係者からの評価

「避難者の“これまで”と“いま”と“これから”をつなげるプロジェクト」は、当初の活動計画とは少し形を変えたものとなりました。

江東区の東雲住宅と、芝浦工業大学豊洲キャンパス、福島県二本松で、学生ならではのアイデアで被災者へのささやかな支援をと計画を立てていましたが、人数、日程等の問題から失敗に終わってしまった活動もありました。

私たちは、東雲住宅でのヒアリング活動から、佐々木さんと出会い、浪江町の請戸の田植踊りの伝統を守るために支援を必要としていること知りました。佐々木さんを通じてのささやかな支援だったかもしれませんが、大学へ招待をして皆と親交を深めたり、講演会への資料作成、伝統芸能の祭典に参加させて頂いたことに感謝を頂けたことを嬉しく有り難く思っています。

## 受賞・メディア取材(新聞、広報誌、TV等)

佐々木さんは日本テレビの取材を受けてその様子が放映されました。

## プロジェクト活動を振り返って(チームとして成長したこと、感動や印象に残っていること、反省、今後の展望について)

プロジェクトの活動を通じて、被災者の生の声を間近に聞いたことで、私たちに出来る支援の難しさを思い知らされたと思います。

プロジェクトのメンバーで、活動への参考にと東雲住宅で行われたワークショップに参加をしたことがありました。ワークショップの内容は、浪江町で今度どのように暮らしていけるのかを10年単位のビジョンを考えていくものでしたが、そこで聞いた生の声は、私の当初の予想とは少し違うものでした。

私は、現実的に難しいということがあっても、被災者の方々の気持ちには、元のまちに戻って暮らしていきたいということに差異はないのではないかと思っていましたが、実際には、特に若い母親世代の方の意見は、戻らずに東京で暮らして行けた方が良く考えているということでした。年配の方の意見は、やはりいつかは生まれ育ったまちに戻れるようなビジョンをお話された方もいましたが、同じまちの被災者同士であっても、住まい方も、気持ちもバラバラになってしまっているのが現実であることを知りました。

どのような支援が出来るのかを伺いに東雲住宅へヒアリングを行った中で、浪江町の伝統の踊りを復興させようと活動を始められた佐々木さんと出会いました。佐々木さんは、請戸の田植え踊りの指導者であり、踊り指導するために福島と東京を行き来したり、活動を広げるための講演会や会議に参加されていたり多忙な活動を行っていました。講演を行う上で使用するパワーポイントの作成を私たちが行い、出来にととても喜んでいただけたことが嬉しかったです。

伝統芸能を披露するふるさと祭りに参加させていただいたとき、佐々木さんと、田植踊りを支える方がたに暖かく迎えていただけたことにととても感謝しています。佐々木が、私たちに一番伝えたかったことは、田植え踊りを生で見たいという気持ちだということだったと思います。カメラ係として参加したり、佐々木さんが東京にいるときは、大学で親交を深めたり、ささやかな支援だったとは思いますが、このような伝統ある田植踊りを知れたこと、佐々木さんと出会えたことをとても誇りに思います。まだ決定してはませんが、今後私たちでより田植踊りの支援に繋がるような広報活動や、ボランティアを募る窓口となれたらと考えています。

